

国立登山研修所所蔵の登山資料について

飯田 肇（富山県立山カルデラ砂防博物館学芸課長）

金山 康成（国立登山研修所専門職）

和田 真幸（国立登山研修所専門職）

国立登山研修所（以下、研修所）は、昭和42年に開所した登山指導者、リーダー養成の研修施設であり、これまで2万人近い研修生を輩出してきた。また、登山団体における施設利用（貸館事業）も行っており、毎年2千名を超す登山者に研修所を利用いただいている。

しかし、研修所内にある「資料室」や「図書室」については、貴重な所蔵資料があるにも関わらずあまり利活用されていないのが現状である（写真1）。そこで本稿では、登山史や登山文化を学ぶ教材として利活用することを目的として、研修所が所蔵する資料についてその一部を紹介する。



写真1 研修所の資料室での展示

（1）所蔵実物資料について

所蔵資料は、「登山用具等の実物資料」、「写真、映像資料」、「図書資料」、「文献資料」などに分類されるが、ここでは、登山用具等の実物資料について概

観する。

①登山用具

ア．登山靴

革製で靴底に金属製の鋲を打ちこんだ鋲靴、靴底がビブラムソールとなった革靴、二重靴と呼ばれるインナーとアウターが分かれた高所用の防寒靴、プラスチック製のアウターシェルとインナーシューズからなる防寒靴、革製に戻った近年の登山靴等が時系列で展示されていて、登山靴の変遷を実物資料でたどることが出来る（写真2）。

また、佐伯富男元専門職員が第1次南極地域観測隊に参加した際、現地で使用した山スキー兼用靴も展示されている。さらに、1975年頃に米国から輸入され、日本のフリークライミング発展に寄与したEBシューズ（通称ラバーソールシューズ）の展示等がある。



写真2 登山靴展示の一部

イ. カラビナ、ハーケン、ロープ

カラビナ、ハーケン、ロープについては、材質、型、環の有無等の異なる種類の物を、何キロの衝撃で破断したかの強度試験を行った記録とともに展示している。ロープも同様に、材質、太さ、強度、用途を併記して展示している（写真3）。

ウ. ピッケル

各時代のピッケルとともに、日本高周波重工業が富山で50本ほど製作した「幻のピッケル」のうちの1本が展示されている。販売当時の箱や専用のピッケルカバーもあり、保存状態が良好な貴重品である。

エ その他

研修会で使用されたアイゼン、ピトン、テント、コンロ、ランタン、ヤッケ、スパッツ、オーバーミトン、目出帽、輪かんじき、山岳スキー、シール等が展示されている。開所当時から現在まで、時系列で用具の変遷を追うことが出来る（写真4）。

② 日本山岳会エベレスト登山隊の装備

1970年、日本山岳会はネパールの登山禁止措置が解除になるやエベレストの登山許可を取得して、5月11日に南東稜から松浦輝夫氏と植村直己氏が日本人として初登頂した。翌12日には平林克敏氏が登頂した。この遠征隊の登山用具が日本山岳会から寄贈されて、登山研修所に展示されている。50年前の高所登山装備が一式揃っていて、当時のヒマラヤ高所登山を知る上でたいへん貴重な資料である（写真5）。

(2) 実物資料の活用について

所蔵実物資料は、所内での展示のみならず外部へ

貸し出して、展示等の利活用に使っている。ここでは、連携協定を結んでいる富山県立山カルデラ砂防博物館での活用例を紹介する。



写真3 強度試験を行ったカラビナ等の展示



写真4 アイゼンの展示



写真5 1970年日本山岳会エベレスト登山隊の登山用具

4. その他

① 寄託資料としての利活用

立山ガイドの佐伯平蔵氏が、1920年に新潟県高田（現在の上越市）へ出向いてスキーの初指導を受けた際に持ち帰り、以後芦峯寺の山岳ガイドのスキー指導に使用されたスキー板（一本杖）が所蔵されている。本資料は、研修所と連携協定を結んでいる富山県立山カルデラ砂防博物館に寄託されて、常設展示室「立山カルデラ展示室」の中の「立山をめぐる山岳ガイドたち」のコーナーでガラスケースに入れて展示している（写真6）。本資料は、寄託資料であるため、5年ごとに寄託期間の更新手続きを行って貸出している。

研修所での展示のみだと見ることが出来る人数が限られるが、公立博物館へ寄託することでより多くの広い層の方々に普及することが出来て、波及効果が期待される。



写真6 寄託した一本杖スキーの博物館での常設展示

② 展示物としての利活用

2022年秋に富山県立山カルデラ砂防博物館で特別展「写真で振り返る日本人のエベレスト」が開催され、その中で、研修所所蔵の1970年日本山岳会エベレスト登山隊資料を貸し出して展示に供した（写真7）。展示資料は、テント（岩壁用）、羽毛服上下、酸素ボンベ等の酸素機器、ヘルメット等である。羽毛服やヘルメット等をマネキンに着用させたり岩壁用のテントを実際に張ることにより、臨場感を持つ

た展示を展開することが出来て、観覧者にもたいへん好評だった。展示期間中は、約5,000名の方に観覧していただき、波及効果も大きかったと思われる。



写真7 エベレストで使用された登山用具の博物館での展示

以上見てきた様に、研修所所蔵の実物資料はその数が豊富であるのみならず、時系列で収集されていることから、登山用具等の変遷を追うことが出来るという特徴がある。また、寄託や貸出しを行うことで、研修所の活動についての波及効果が期待される。今後も、この特徴を活かして、所蔵実物資料の利活用や調査研究が進むことが期待される。